

表現。

たとえば、「ひさかたの 天つみ空に 照る月の 失せなむ日こそ我が恋止まめ」(『万葉集』巻一二)という歌があります。「大空高く照る月がなくなる時こそ、私の恋も静まるだろうけれど」といった意味です。「こそ…已然形」で逆接の意味が出ています。「大空高く照る月がなくなる時はないから、私の恋は止むときがない」という意味を言外に表しています。

もう一つ、今度は『伊勢物語』と同時代の『古今和歌集』の歌。

「昨日こそ 早苗とりしか 一つのまに 稲葉そよぎて 秋風の吹く」(巻四)。この歌は、「つい昨日早苗をとって田植えをしたばかりだというのに、いつの間にか稲葉がそよいで秋風が吹くことだ」という意味。「こそ…已然形」で、「昨日早苗をとって田植えをしたばかりだというのに」という逆接の意味が出ています。ですから、『伊勢物語』の女の歌も、言外に「再婚することにはなっているんですが、愛しているのはあなたです」といった意味がほめかされているのです。元の夫は、どう反応するのか？

男は、こんな歌を詠んで答えた。

B 梓弓 ま弓つき弓 年を経て わがせしがごと うるはしみせよ(一二年月を重ねて、私があなただを愛したように、新しい夫に親しんで下さいよ)

男の歌は、あくまでやさしい。「幸せになれよ」と言って去っていく男の歌だ。男は、おそらく三年間も女を放っておいた自分が悪い、

と、自責の念にかられたのであろう。男は、便りこそよきさなかつたけれど、女を忘れたわけではなかつた。現に、ちょうど三年目に帰ってきたのだ。女は、歌に託された男の優しさに打たれた。ああ、私が本当に愛していた人は、この人だった。女は、詠んだ。

C 梓弓 ひけどひかねど 昔より 心は君に よりにしものを(一あなたのお心はどうであつても、私の心は昔からあなたにお寄せしていましたのに)

女は、男への未練が断ち切れずに詠んだ。でも、だからといって事態が変わるわけではない。男は、潔く身を引いて去っていった。女は、男の去っていく足音を聞き、激しい後悔の念に襲われる。あと一日、あと一日、あの人の帰ってくるのが、早かつたら、私は、再婚なんか決意しなかつたのに。いや、今からでも遅くない、私が好きなのはあの人のだ。誠実だからといって別の男と再婚を承諾したのは誤りだつた。元の夫と暮らそう。女は再び決意しなおした。時間は刻々と経っていた。女は、すぐに飛び出して、男の後を追って行った。でも、男の姿は見えない。通りを一つ違えただけで、人は相手を見失う。女は走る。ここにもいない。じゃあ、あっちの道かしら？ 踵を返して男の姿を探し回る。いない、いない、いない。普段、走ったりしない女は、すぐに体が、たがきた。

女は、清水のある所に倒れ臥してしまった。心臓は激しく鼓動し、今にも破裂しそうだ。男を失った絶望感が全身に覆いかぶさってくる。それでも、女は男に愛の気持ちを伝えたかった。そこにあつた岩に、